

---

# 貴方のお姫さま

白兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

貴方のお姫さま

### 【Nコード】

N1288E

### 【作者名】

白兎

### 【あらすじ】

高校2年の鳴海夢は1人の少年の事が気になっている。気持ちを抑えきれない状態の夢。彼女はどうかするのか？そして少年は・・・。

晴れた日。

とある喫茶店で休んでいる少女2人がいた。  
学校帰りなのか制服を来ている。

「やっぱり・・・」

「やっぱり何？」

「・・・カッコいい!!」

「はぁ・・・」

「だって、スタイル・運動神経・頭脳、どれをとっても輝いてるよ！」

このはしゃいでいる少女。  
名前を鳴海夢という。

そして反対に座り、呆れた顔をしている少女は葉山しおり。  
2人は高校1年の時に知り合った。

それから1年。

どこに行くにも一緒だ。

「<sup>るか</sup>瑠花くん、彼女とかいるのかな・・・？」

夢は身を乗り出して、しおりに尋ねた。

「うん・・・いるようにはいるようには見えないけど。というか、

もう名前で読んでるのか」

「ホント！？良かった〜」

夢は綾津瑠花という隣クラスの少年に惹かれていた。

「よし！明日、話しかけちゃおう！」

「頑張れ〜」

しおりはやる気無く答えた。

翌日、夢は登校するや否や瑠花を探した。

「まだ来てないかな？」

「アンタいくらなんでも早いでしょ。HRまで35分もあるよ」

しおりは携帯で夢に起こされ、早起きする羽目になった。

断れば良いのだが、しおりの優しさ（？）なのか、付き合ったのだ。

「しおりちゃん、ベランダから見えないかな？」

しおりは話を聞けたが、いつも暴走すると止まらなないと分かっていたので我慢した。

「あー！」

「なに？来たの？」

「うん！いつ見ても飽きないな」

「それ微妙に変態入ってるよ」

「廊下で待つてよ」

夢は瞬間移動したかの様な速さで教室を出た

「……どこまで追いかけるのか見ものね」

しおりもその後続いた。

「おはよう！」

「……うん、おはよう」

夢が勢い良く挨拶をしたためか、瑠花は少し驚いていた。

「朝から元気だね」

瑠花の横で声をかけたのは瑠花のクラスメイトである入江守。  
いつも元気だよ　と、夢は言おうとしたが、後ろからしおりにブラ  
ウスを引っ張られ、声を出せなかった。

「朝からごめんね」。もう少し静かに登場させれば良かった」

「別にいいよ」

そう言うと教室へ入ってしまった。

「一目見ただけでも幸せ」

「はいはい、良かったね。あんまり煩くすると、引かれるかもよ？」

「それは嫌だな……。でも、瑠花くんに嫌われる様な気がしないんだよね！」

「……………」

「しおりちゃん？」

「え？……ああ、ごめん」

「急にぼーっとするから……」

「もう！夢が変なこと言うからだよ」

しおりは笑ながら答えた。

「そうそう！夢ね、今年の文化祭で何か係りをやろうと思うの！」

「……何か裏でも？」

「バレた？」

しおりは大体予想がついていた。  
きつと瑠花の事だろうと。

「瑠花くんは何の係りになるんだろう?」

「聞いてこようか?」

「え!直接?」

違うよと、しおりは首を振った。

「さつき隣にいた奴に」

夢は納得した顔をした。

しおりは先程瑠花の隣にいた入江守と知り合いだと聞いていたのだが、クラスも部活も違うのにどうして知り合いなのか、夢にとつて謎だった。

が、2人が仲介となる事で瑠花と近づけるのならばそれで良かった。

「ありがとう!じゃあ宜しくね、しおりちゃん」

「まかせといて」

しおりは親指を立て、必ず情報を掴む事を約束した。

昼休み。

昨日に引き続き、晴天だった。

雲がない青い空は、澄んでいて綺麗だった。

「・・・どうだった?」

夢が不安気に尋ねた。

「受付だって」

「受付か・・・」

「どうするの？」

「やる！受付嬢やります！」

「あたし達のクラスでやりたい人はいないみたいだね」

しおりが書記ノートを見ながら言った。

「学級委員に言ってくる」

というと、すぐに飛んでいってしまった。

「・・・行動早いな」

後に残されたしおりは、夢の行動力に感心していた。

「okサイン出ました」

「おー！頑張れ」

「しおりちゃんもです」

「聞いてないな」



しおりは夢の首を締めるフリをした。  
顔は笑っているが、行動は正反对だった。

「ぎゃー！ごめんなさい！2人じゃないと駄目なんだって」

「だ・か・ら？」

「友達はしおりちゃんしかいないんだもん」

「・・・まあ、いいか」

しおりは諦め、手を夢の首から離れた。  
夢は顔を歪めて苦しそうにしている。

「来週、集会があるんだって。そこで瑠花くんに会えるかも・・・」

夢はまた夢を膨らましている。  
しおりは良かったねと、呆れ顔で言った。

夢、念願の集会の日。

放課後に早くならないかと、朝からそわそわしていた。

「しおりちゃん！やっと放課後だね」

「そうだね。受付する時間が綾津君と同じになるといいね」

「うん！」

夢は本当に嬉しそうだ。

集会を行う教室に着き、クラス順に席に着いた。

「あ、入江だ」

しおりが扉の方を向いて言った。

「おつす！放課後とかダルいよね」

そついいながら夢達の後ろの席に座った。

「アンタ1人？」

しおりがいるはずの瑠花がいない事を指摘した。

「今はね。あと少しで瑠花も来るよ。アイツ掃除当番だから」

「そつ」

「何？俺じゃ役不足？」

笑いながら守は尋ねた。

「そういう事ではないです」

しおりの隣にいた夢が答えた。

「何でかしこまってんの？初めて話すけど気にしなくていいから」

「・・・うん」

少し俯きながら夢は言った。

「そうだよね。入江じゃ嫌だよね。綾津君じゃないとね」

「いや、そんな事ないから」

焦った様子で夢は否定した。

「葉山、余計な事言っな！」

「はいはい」

しおりは守の注意を気に止めず、受け流した。  
そこに瑠花が教室に入ってきた。

「あ・・・！」

「主役登場か！」

「・・・何？」

同じタイミングで夢と守が反応したので、瑠花は疑問に思った。

「ごめんね。今、綾津君の話してたの」

「僕の・・・？」

「変な話じゃないよ」

「そう・・・」

瑠花が席についてすぐに先生が入ってきた。そして集会が始まった。

時は流れ、文化祭当日。

夢としおりは午前の受付担当だった。

そして夢の運が良かったのか、瑠花達も午前の担当だった。

仕事は基本的に署名とパンフレット配布だけなので、夢は何度も瑠花と話す事が出来た。

夢は幸せに感じた。

今まで思い焦がれていた人と話せたのだから。

そして、後夜祭終了後、「南の階段」で瑠花と会う約束をした。

「南の階段」とは、あまり人が通らない場所である。

その為、告白する人がよく利用する。

そう、夢は思いを瑠花に伝える決心をしたのだ。

後夜祭終了まであと少し

「瑠花くん！」

夢は先に着いていた瑠花に声をかけた。  
その声に反応して、瑠花は手を振った。

「私が約束したのに遅くなってごめんね」

「いや、時間にはまだ余裕があるから」

「そ、そっか・・・」

それからしばらく沈黙があった。

いざ言おうとすると、言葉が出ないものだ。

しかし、瑠花は何も言わない夢を責めなかった。

「あの・・・ね」

夢がとうとう切り出した。

「私・・・瑠花くんが好きです！」

勢いに任せ、夢は続ける。

「なんでだろう・・・？一目見た時から気になってしかたがなかったの」

素直な気持ちを瑠花にぶつけた。

「・・・そっか」

一通り聞いた瑠花は呟いた。

そして、

「ありがとう。告白されるってこんなに嬉しいんだね」

と笑顔で言った。

それを見た夢は告白が成功したと思った。

次の言葉を聞くまでは。

「今までお疲れ様。もういいよ」

「え……」

夢は糸が切れたかのように倒れた。  
瑠花はそれを黙って見ていた。

「酷いな。支えてあげればいいのに」

影から守が出てきた。

そして倒れた夢を抱え、瑠花の前に来た。

「しっかし瑠花も物好きだな」

「何が？」

「女の子に告白される気持ちを知りたいなんてさ」

「出来心だよ。でも、途中で飽きたんだ。だから彼女に急いでもら  
ったんだよ」

「可哀そうに……。この子の2年を弄んじゃってさ」

「だったら止めればいいだろ」

「どうせ止めないだろ？ましてしおりも置いているんだからな」

「それ、彼女の本当の名前じゃないよ」

「え！？アイツも？」

「僕と君みたいに偽名さ。名前通りの行動をしてもらっていたんだ」

「この子の行動を報告していたのか・・・」

「まあ、終わった話だけどね」

瑠花はそう言うと言と歩き出した。

「おい！どうすんだ、この子」

「好きにしていよ」

「人権も何もないな・・・」

「家にでも持って帰ったら？」

瑠花はとうとう見えなくなってしまった。

守は少女を背負い、保健室まで運んだ。  
そしてベッドに寝かせ、呟いた。

「悪かったな。催眠にかかり易いが故に標的になってしまっ・・・」

少女は眠り続けている。

「俺じゃ瑠花を止められないんだ」

少女の髪を撫でる。

「そういう家系なんだ」

守は暗くなった窓の外を見ながら、嘆いた

綾津瑠花。

自分の思いがままに催眠を使う。

入江守。

瑠花が行動しやすい様に邪魔な物を取り除く。

葉山しおり。

標的を常に観察し、報告。

以上3名、いずれも……。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1288e/>

---

貴方のお姫さま

2011年1月26日06時33分発行